



陽東中だより

第4号

平成30年7月3日
発行者 校長 酒井功夫

目指す生徒像 ～本気 勇気 元気 根気～

楽しかった修学旅行

6月10日(日)から12日(火)までの2泊3日で3年生とともに修学旅行に行ってきました。当初台風5号の影響で、関西地方は風と雨で大変ではないかと心配されましたが、滞在していた3日間ともに傘の出番はほとんどありませんでした。これは、日頃からの生徒の行いによるものと考えています。

1日目は、奈良を観光しました。京都駅からクラスごとに観光バスで奈良公園まで行き、南大門前でクラスの写真撮影をして、その後奈良公園ガイドに連れられて大仏殿を見学しました。ほとんどの生徒が、初めて大仏を見たそうで、予想していた以上の大きさに感動していました。その後班別行動となり、京都の宿舎である「旅庵 花月」までを最終ゴールとして、興福寺、薬師寺、平等院等の見学をしました。

2日目は、タクシーを利用した班別行動でした。最近では伏見稲荷や東福寺が人気だそうで、多くの班が見学場所として選択していました。もちろん、昔からの人気である清水寺や金閣、銀閣も多く班が見学しており、中にはレンタル着物に着替え京都市内を観光した班もありました。

3日目は、学級ごとの見学でした。私は、1組の生徒とともに東寺、金閣寺、二条城を見学しました。東寺は、朝早かったこともあり、観光客の姿はほとんどなく、ゆっくりと見学することができました。しかし、さすがに金閣寺、二条城ではなかなか前に進めないほどの人、人、人の波でした。その後、京都駅に集合して宇都宮に帰ってきました。大きな事故もなく宇都宮に戻ってこられ、楽しい修学旅行となりました。今回の修学旅行でも、生徒にとって一番良かったところはやはり旅館で過ごした一時だったようです。



学力向上を目指して

ここ数年、宇都宮市のほとんどの学校が学力向上を課題としてあげています。昨年度の本校生徒の学力は、宇都宮市全体と比較すれば、平均以上の成績を収めています。しかし、個々の学力を見ていくと基礎・基本が定着していなかったり、思考力・判断力・表現力に課題があったりと安心できるものではありません。特に、本校生に限ったことではありませんが、文章を書くことに抵抗感のある生徒が少なくないようです。LINE等の普及により、短文でのやりとりが増えてきたことによるものと考えています。本校では、ダイアリーや普段の授業において、文章を書くことに慣れさせるよう指導を重ねています。

ところで、基礎学力の向上を目指す取組が今年度も始まりました。これから毎週



水曜日には、帰りの会前の10分間、スタンダード学習と呼んでいるドリル学習を全学年全クラスで実施していきます。また6月20日からは、3年生の希望生徒を対象としたステップアップ学習を始めました。ボランティアを募ったところ、宇都宮大学の方から学生が数名来てくれ、放課後約1時間、自分で好きな教科を自分で用意したもので勉強することにしました。分からないところは、すぐに担当した先生や大学生に質問することができ、かなりの効果が得られたように見えました。これから12月までは、3年生を中心として取り組み、来年1月、2月は2年生を対象としていく予定です。

しつけについて

中学生ともなりますと、自我の自覚もできるようになり、親の言うことをなかなか聞いてくれないという問題が生じてきます。そこで、これからの家庭での生活の参考にしていただければと思い、ある本に書いてあった「しつけ」についての考え方を紹介します。

しつけとは、一般的に言って、基本的な行動の様式、あるいは、道徳的行為の習熟の状態とあってよいと思います。三つ子の魂百までとか鉄は熱いうちにうてとか言われていますように、本来的には、しつけは小さいうちからの指導が大切で、一旦身に付いた習慣というものはなかなか改めることが難しいものです。

しつけの基本は家庭で行われなければならないものです。さまざまな生活上の振るまい方は家庭でこそしつけられなければならないはずで、学校は、学校として、同年代の生徒たちの集団生活という観点から、例えば、生徒手帳に掲げられている、さまざまな内容について、それが望ましく身に付くように指導を進めているわけです。家庭では、家庭として生活の基本となる事柄については、正しく、しつけなければなりません。

例えば、登校・帰宅の時刻を守るとか、睡眠時間とあわせて、起床・就寝の時刻を守るとか衣服の清潔、あるいは、時間のけじめをつけた生活の仕方、小遣いの使い方、等々あげればきりがありませんが、これらの中味については、ぜひ家庭できちんと指導してもらいたいことです。しかし、しつけをしていくには、中学生の心理、心の内側をよく理解してあげる必要があります。このことを前提として、いくつか必要と思われる事柄について触れてみます。

第一は、子どもとよく話し合うということです。そのことが、生活の上で、どれだけ必要な事柄を相互に理解し合うということです。ただ感情だけで指導するのではなく、しつけの内容がどれだけ目的にあっていくかということを十分に説明しなければ納得して努力しようと思いません。

第二は、習慣として身に付けさせるには、反復ということが必要です。長い目で諦めずに指導するということです。うちの子はだめだと諦めてはいけません。

第三に、親こそ見本だということです。親が寝坊して、朝ご飯もつくってやらないのでは、子どもに早起きして学校へはゆとりをもって出かけるなどとは言えた義理ではありません。

最後に、しつけを行動の指導、外面からの指導とだけ考えては、正しく身に付かないのです。子どもの内側、心の内面から意欲や希望が生まれてはじめて、行動化できるということも理解しておかなければなりません。

放任型の家庭から非行が生まれやすいと言います。厳しすぎても、甘やかしてもいけません。子どもとよく話し合い、言い分も聞いてあげながら、親も一生懸命なんだと感じ取らせることが大切です。

いかがでしょうか？私自身も二人の娘をもつ親として、子どもに対する今までの接し方を反省するところがあります。ぜひ保護者の皆さんも、家庭での子どもへの接し方の参考にしていただければ幸いです。

- ・「陽東中だより」をはじめ、各種たよりや学校行事等の情報はホームページ「<http://www.ueis.ed.jp/school/yoto-j/>」にてご覧いただけます。
- ・ご感想、ご意見等は、E-mail「yoto-j@ueis.ed.jp」まで、お寄せください。